

Title	日本語における複合指示詞の歴史的研究
Author(s)	清田, 朗裕
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/33861
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏名 (清田 朗裕)

論文題名

日本語における複合指示詞の歴史的研究

論文内容の要旨

本論文は、日本語における複合指示詞のいくつかを対象とし、それぞれの語史を記述しつつ、歴史の変遷の過程を明らかにすることを目的とするものである。具体的には、指示代名詞由来の複合語としてソコソコ、カレコレの2語を、指示副詞由来の複合語としてトカク、トニカクの2語を、指示連体詞が関わる派生表現として「NP+ソノモノ」を取り上げた。

研究方法は次の通りである。初出例がみられる中古から現代までの文学作品を中心に、主に電子化資料を用い、それ以外の資料にも目を配りつつ用例を収集した。そしてそれぞれの語史を記述した上で、歴史の変遷の過程を考察する。その後、明らかにした言語事実、歴史の変遷の過程が、他の日本語史における言語事象とどのように関わるのか、という点について考察を加える。

序論では、研究史を概観し、注意すべき先行研究を挙げつつも、本論文で対象とする複合指示詞に関する研究はあまりなされていないこと示し、本研究の位置づけをおこなった。

第I部第1章では、まずソコソコの語史を記述し、その後考察を加え、以下の点を明らかにした。

ソコソコは、初出例のみられる中古から〈不定の場所〉を表す指示代名詞として用いられていたが、中世後期にメタファー拡張が進み、具体的な〈空間〉の〈場所〉から、抽象的な〈状況〉を表せるようになった。その〈状況〉は、複数の対象が置かれた結果状態を前景化させるものであったために、複数の対象が多くもなく少なくもない、〈中途半端な〉状態にある、また〈いい加減な〉状態にあると解釈されるようになった。これは、ソ系指示詞が、直示を本質としてもツコ・ア系指示詞が指示できない対象を指示するという特徴をもつことと並行的であり、結果として、〈中程度〉を表す程度副詞として用いられるようになった(程度副詞用法)。また、程度副詞用法の用例の中には、修飾先の述語句シテが省略されることがあり、省略された場合、ソコソコ(ニ)の直後に区切りとなる休止が置かれたと考えられる。したがって、このような例は、休止の直前まででひとまとまりの句を形成すると再解釈され、直前の名詞句と結びつきを強めることとなり、結果として「 α モソコソコ(ニ)、 β 」という固定した表現へと構文変化を果たした(複合辞用法)。複合辞用法は、程度副詞用法の一種であるため、〈中途半端に〉おこなうことから、〈 α の表す事態を完全には終えずに、 β の事態へ移る〉という意味をもつが、〈 α から β へ移る〉という部分については、文脈から、何らかの理由・意図を感じ取ることができれば、〈 α の事態から β の事態へ急いで移る〉という解釈が可能になる。辞書記述において、〈急ぐさまを表す〉と記述されているのは、この何らかの理由・意図を感じ取った場合の解釈であるといえる。その後、〈中程度〉を表すソコソコは、数量詞とも結びつくことになり、その数量を中心とする〈概数〉を表すようになったことを示した(接尾辞用法)。

次に第I部第2章では、カレコレの語史を記述し、考察を加え、以下の点を明らかにした。

カレコレは、初出例のみられる中古から複数の対象を表す指示代名詞として用いられていたが、その〈複数性〉ゆえに〈色々〉といった副詞性をもつようになった(副詞的用法)。また、〈複数性〉は数量詞との結びつきを強め、中世には、数量詞が前接し、〈合計〉や〈概数〉を表す、連体詞的に用いられる用法を獲得した(連体詞的用法)。その過程には、「以上・都合・合わせて」等の〈合計〉を意味する副詞的表現や、「程・余騎」等の〈概数〉を表す接尾語との共起があった。しかし、この段階では、〈ヒト〉や〈モノ〉といった具体的な対象を指示していた。その後、カレコレは、特にカ系列指示詞が観念用法をもつことから、具体的な〈モノ〉から抽象的な過去の時間である〈トキ〉との結びつきを強めることとなり、近代以降においては、概念的・抽象的な対象である〈トキ〉に関わる数量Qを、〈概数化〉する用例が多く観察されるようになる。そしてついに、連体詞的用法のみみられるようになったことから、

現代語においては、カレコレの品詞は連体詞であると指摘した。

第Ⅱ部第3章では、トカクの語史を記述し、考察を加え、以下の点を明らかにした。

まず現代語のトカクについて、先行研究を基に整理し、構文的に大きく三つのタイプが認められることを示した上で、構文毎に異なる意味が認められることを確認した。その後、トカクノNP（NPは名詞句）におけるNPのタイプの変遷とマイナスイメージをもつようになった理由、トカクPP（PPは述語句）が〈あまり好ましくない〉というマイナスイメージを伴う〈傾向〉を表すようになった理由、そして近称の指示副詞カクとの差異について考察を加えた。

具体的には、現代語のトカクノNPの用法では、NPには、発言・思考に関わる名詞句がみられるが、中古においてはそのような様相はみられず、現代語と同じ様相を呈するのは、中世以降であることを明らかにした。そして、中世では、否定表現と極めて多く共起することを指摘し、それが、トカクノNPにマイナスイメージをもたせる要因となったことを明らかにした。

次に、トカクPPの用法では、中世までは具体的な不定の複数の対象を指示していたが、近世において、抽象的な〈傾向〉を表す用例がみられるようになることを指摘し、〈傾向〉を表す場合、マイナスイメージを有する文脈で用いられていたために、そのような環境で用いられるものと語用論的に解釈され、現代語においても、トカクPPがマイナスイメージをもつようになったことを示した。

最後に、トカクの構成要素にもなっている近称の指示副詞カクと対照することで、トカクとカクの意味的・構文的差異について指摘した。特に構文的特徴において、カクは副助詞と共起できるが、トカクは共起できないことを示し、その理由として、トカクのもつ〈不定〉の〈複数性〉と、副助詞が担う〈限定〉機能が意味的に矛盾するからだとした。

第Ⅱ部第4章では、トニカクの語史を記述し、考察を加え、以下の点を明らかにした。

トニカクは元々トニカクニであり、〈複数性〉が形態的に担保されていたが、近世前期にニの脱落によってトニカクがみられるようになった。その時にはすでに、〈指示性〉・〈複数性〉を喪失している例が観察された。また、その変化の過程で、〈除外〉の意味を獲得した。その後、近代において、修飾先の述語句がなく、トニカク自体がコピーを伴い述語として働く、述語化という過程を経ることによって、「 α ハトニカク、 β 」という固定した形式をもつようになったことを明らかにした（複合辞用法）。

第Ⅲ部第5章では、「NP+ソノモノ」の発生について考察した。まず、古代語では、ソノモノの単独例がほとんどであり、「NP+ソノモノ」は、若干の例外を除き、日本語資料にはみられない特異な形式であることを確認した。その上で、先行研究に導かれ、洋学資料、特に英学資料における再帰代名詞「itself」の直訳例を観察し、「NP+ソノモノ」が成立する萌芽となる例を探索した。その結果、Brown, Goold 著、明治19年刊行の『英吉利英文典講義』という英学資料に「語其物自身」という、ソノモノを含む例がみられることを明らかにした。この例は、先行研究において、「自身」はしばしば省略される、という指摘とあわせると、「語其物（自身）」となり、「NP+ソノモノ」と再解釈しうることを示した。以上のことから、上記の例が「NP+ソノモノ」発生の萌芽となりうることを示した。

第Ⅳ部では、まずここまで明らかにした複合指示語の言語事実を再整理し、共通する特徴を挙げた。具体的には、①〈指示性〉の喪失が確認できる、②〈複数性〉の喪失が確認できる、③構文変化が確認できる、の3点である。

この変遷過程は、文法化における一方向性仮説に沿うものであった。しかし、以上の変遷は、文法化現象に留まらず、他の日本語史における諸現象と関わるものであることを示した。具体的には、トニカクの複合辞用法の成立過程と、係り結びにおける二文連置説で示されている構造変化とが、類似する過程を想定できるものであることを指摘した。

以上の内容から、本論文で対象とした複合指示詞の歴史的変遷は、偶発的・散発的な変化なのでは決してなく、他の言語事象と関わるものであることを示した。そして、語史研究は、その語自体が抱える意味変化、構造変化を明らかにすることだけで満足せず、他の言語事象との関係をも考慮することによって、より実り豊かな成果を挙げられることを指摘した。

結論では、ここまで述べてきたことのまとめをおこない、その上で、本論文で対象としなかった複合指示詞を含む諸指示詞の研究を推し進めることは、指示詞研究のみならず、日本語史研究の発展に寄与できることであることを述べた。最後に、残された多くの課題を挙げた。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (清 田 朗 裕)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 教授 金水 敏 副 査 大阪大学 教授 岡島 昭浩 副 査 大阪大学 准教授 矢田 勉
論文審査の結果の要旨 以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：日本語における複合指示詞の歴史的研究

学位申請者 清田 朗裕

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 金水 敏

副査 大阪大学教授 岡島昭浩

副査 大阪大学准教授 矢田 勉

【論文内容の要旨】

本論文は、コレ、ソコ、カク等の指示語から複合・派生した語彙のいくつかについて、その語誌をたどったものである。主要部分は次のように構成されている。

序章

第Ⅰ部 指示代名詞の語史

第1章 ソコソコの語史

第2章 カレコレの語史

第Ⅱ部 指示副詞の語史

第3章 トカクの語史

第4章 トニカクの語史

第Ⅲ部 派生表現の語史

第5章 「NP+ソノモノ」の発生

第Ⅳ部 複合指示詞の歴史と日本語史

終章

第Ⅰ部は指示代名詞の複合形ソコソコおよびカレコレを取り扱う。第1章では、ソコソコの用法を名詞用法、程度副詞用法、複合辞用法、接尾辞用法その他に分け、文献資料においてこれらの用法がいつどのように現れたかを検証している。この中で、具体的な空間的な意味が抽象的な状況を表す意味へと変化していったことを、メタファー拡張によるものと捉える考え方を示している。第2章ではカレコレを取り扱い、中古では代名詞であったこの形式が現代語では連体詞になっていることを取り上げ、その推移の過程を資料により明らかにしようとしている。この中で、軍記物に用いられたことの影響、主要な指示詞からカ系列が退いたことが要因であると捉えている。第Ⅱ部では指示副詞ト、カクから生じたトカク、トニカクを取り上げる。第3章では、トカクの語義変化、特に今日のトカクが持っているマイナスイメージがいつ、どのように生じたかという点に焦点を当てて論じている。その要因として、中世以降に否定表現との共起が増加したこと、近代に不可能表現と多く結びついたことを挙げている。第4章ではトニカクを取り扱う。この表現は、命令・意思表現を修飾したり、状況を提示した

上でそれを留保する意味を表したり、「 α ハトニカク、 β 」という複合辞として用いられたりするなど、多彩な用法を持つが、その変化の過程と由来を資料から説き明かそうとしている。第Ⅲ部第5章では、「真剣そのもの」のようなソノモノの用法が、翻訳語として生じた過程についてスケッチを示している。第Ⅳ部では、ここまでの観察をまとめて、指示代名詞や指示副詞であったものが品詞性を変え、より文法的な成分へと転成していくなかで、指示性の喪失、複数性の喪失が伴われている点を捉え、文文化の過程として捉えうることを述べている。

【論文審査の結果の要旨】

指示詞という、古来日本語では大変使用頻度が高い主要な語彙は、一方で複合や派生により多彩な語彙を生み出し、またその意味も大きく変化させてきた。このように特徴ある語群であるにも関わらず、従来十分な光が当てられなかったこの領域で、本論文により初めて本格的な総合的な考察が加えられたと言ってよいであろう。本論文の特徴は、歴史文献を精査し、おのおのの変化の起こった時期を的確に取り出していること、またメタファー拡張や文文化など、語義変化の理論を援用して説得力のある説明を施している点などが挙げられよう。ことに、いずれの用法においてもモノ、ヒト、トコロ等の具体的な指示を担っていた形式が指示性を曖昧にしていくとともに文法形式も変化している点を捉えることができた点は高く評価できる。

しかしながら、本論文には目に付きやすい弱点も少なからず見られる。例えば多くの資料を調査対象としてはいるが、文書資料など特定の分野は（今日では電子化されて簡単に参照できるにも関わらず）放置されているため重要な用例を取りこぼしている点、論理的な詰めが甘く、十分に検証されないまま仮説が積み上げられる点、日本語には認められない文法的な「数」の概念を軽々しく持ち込んで論証に用いようとしている点など、十分な説得性を持ち得ない箇所もいくつか見られる。

とはいえ、「複合指示詞」あるいは「指示詞からの派生表現」という領域が意味的、構文的に興味深い問題をはらんでおり、今後の研究への先鞭をつけたという点で本論文の成果は十分評価できる。以上の点から、本論文を学位申請論文としてふさわしいものと結論づけられる。